

# 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

井上 好人

## 1. 問題の所在

近代日本の学歴エリートの礎を築いたのは旧封建身分の一体どのような層が中心だったのか。また彼らは属性主義から能力主義への価値転換を渡り歩くためのどのようなエートスと戦略を持っていたのだろうか<sup>(1)</sup>。このような旧身分層の新たな階層秩序への再編問題を扱う士族研究は、近年、士族を単一の集団として見るのではなく、武士の“構え”や社会的意識、財産ストック、そして文化的エートスが旧身分内で不均等に配分されていた点に留意して考察する方向へ進んでいる。

優れた実証研究として、旧藩時代の身分と維新後の財産ストックに着目して士族の学校利用や職業選択の特徴を分析した園田・濱名・廣田(1995)があげられる。まず、明治19～20年の鳳鳴義塾在学者で旧篠山藩の子弟71人について身分内序列と生活水準から分析した論考では、旧上級武士層が学校利用の多数を占めしかも卒業／退学にかかわらず上級学校を経て学歴エリートへと転化していったことが明らかになっている。また、明治16～17年の岐阜県士族の生計実態調査をもとにして行われた身分と近代的職業の関連についての分析では、維新後も比較的豊富な財産ストックを保有していた旧上級武士層が優位に「庶業」への転身を果たしていることが明らかになった。つまり、旧封建身分上位者による財産を利用した有利な社会移動の実態が確認され、上級武士層の文化・教養の「能力」への読み替えによる再生産、という仮説が提示された。

果たして近代学校で試される「能力」は上級武士の文化やエートスのみに親和性

があったのだろうか。また彼らの再生産戦略は明治10年代末までのアノミックな時期だけでなく、学校制度が整備され地方から高等教育機関へのルートが確立した後も有効に機能したのだろうか。小論はこのような問題意識のもと、石川県立金沢第一中学校（以下、金沢一中）の卒業生データを用い、先行研究の仮説を検証するものである。ただし、分析視角と利用する資料の性格は次のような点で異なる。

第一に、先行研究で用いられた身分効果を示す資料は〈家禄→秩禄処分を経た財産ストック〉の大小という経済的尺度に限定されていた。小論はむしろ立志観や日常倫理、教育観などの社会的意識や文化的エートスに着目した資料分析を行いたい。近代セクターへの関わり方の態度について個人や集団の社会的意識が重要な分析ファクターであることはバーガー（P. Berger, B. Berger, and H. Kellner 1973）に依るまでもない。また、社会移動に関する意識や態度が世代を経てもなお残存していることは安田（1971）によっても実証されている。このように家禄だけではない要因によって醸成されてきたエートスは、維新の変動を経ても旧武士の子弟教育の態度に相当の影響を及ぼしていると考えられるからである<sup>(2)</sup>。そのために旧藩の社会・文化的基盤を踏まえながら、各家の数代前からの「職」の経歴や身分内の上昇／下降の状況を示す資料を用いる。

第二に、分析時期を明治中～後期とする。平民層が上からの能力主義規範に呼応して上昇アスピレーションを湧出させるまでにタイムラグがあったことは周知のとおりである（ドーアによれば就学率が急増する明治23年以降）。また、士族の再生産戦略が職業効果を媒介にしたものに移っていく時期は大正初期である（竹内1999）。とすれば、明治中期以降——地方に県立の中学校が整備され旧下級武士層や平民層にも平等な競争機会が開かれ始めたとされる時期——にかけて身分効果に基づく格差は認められるのだろうか。

旧加賀藩の版図である石川県の金沢一中を分析対象に選んだのは、次のような利点と意義をもっているからである。加賀藩は維新の潮流に乗り遅れた大藩の一つで封建遺制を抱えたまま明治を迎えた藩である。園田（1993）の表現を利用すれば、身分秩序の機能主義的再編はほとんど見られなかったと言われている。ということは“加賀百万石”武士団の解体と再編は維新後に持ち越されたわけであり、属性主義から能力主義への転換に生じる諸集団間の葛藤は明治期の学校教育において集約的に表出されているだろうと想像できる。石川県の中等教育機関はこれゆえに魅力的な研究対象である。明治26年創立の金沢一中は石川県における最初の県立中学校である。同校は藩校の系譜を引くものではなく、特定の階層に有利なバイアスはか

## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

かっていない。さらに、創立以来昭和戦前期にかけて石川県からの人材の選抜—配分の主要な機能を担ってきた名門中学であるので、その卒業生はまさにエリート予備軍の標本にふさわしいと考えられる。

## 2. 資料の概要と分析の枠組み

利用する資料は、金沢一中の『卒業生名簿』（第一期卒業生から）をもとに、『年度別卒業生方嚮調』、『卒業生徒記名簿』、そして『同窓會員名簿』（昭和6年）と『會員名簿』（昭和10年）を参照しながら、族籍、本籍地、戸主名、卒業時の席次（成績）、卒業後の当初進路先、最終学歴、昭和6年時点の居住地と職業などの項目についてデータベース化したものである。成績は席次を指数化して、「席順スコア」（各年次の卒業生100人あたりの席次に換算した数値）と「席順ランク」（席順スコアを5等分して1（最上位）～5（最下位）の5段階評定で表した指数）で表記した。士族の旧加賀藩時代の家は、金沢に本籍を置く士族（[金沢士族]）の戸主名を「先祖由緒並一類附帳」（以下、「由緒帳」と略記）の目録（『加越能文庫解説目録上巻』）等と照合することによって48名を同定した。彼らの卒業年度は明治30年～36年である。同期間の金沢に本籍をもつ士族出身者が165名であるから本サンプルは29%の抽出率となる。「由緒帳」とは明治3年（一部はその前後）に金沢藩庁に提出された先祖由緒帳で、当主の略歴から先祖以来の系譜と略歴、当主の4親等までの親族が書かれている。同帳は11,761点のみ現存しており、士族・卒族あわせた17,000戸のうち3分の1が紛失している。また、同帳を提出した家は基本的に士族編入されたといわれている。「48名」についてはそれぞれ原本にあたり家格や家系の履歴を確認した。当然、彼らは由緒帳提出時に戸主だった者を父に持つ世代という性格を帯びている。父の明治元年時の平均年齢が22歳であるから抽出された「48名」は“遅れてきた第二世代”といえる。抽出率が低い原因は「由緒帳」の一部紛失に加えこの世代的な要因によるものだと考えられる<sup>(3)</sup>。父世代は旧藩の「職」を全うすることもできず、とって近代学校の階梯を昇る機会もなく新しい職業へと転身したりあるいは無業に留まることを余儀なくされた世代である。ということは、本人の社会移動における父の学歴や職業効果の影響は少なく、専ら財産ストックの大小か旧藩時代の家格や「職」に由来する社会的意識、あるいは家庭教育や交友関係など文化的な要因の影響が大きいと考えられる。ただし、本資料には親の資産状況を示す項目は含まれていない。

家格については、明治2年の「士分の階級」（『加賀藩史料幕末篇下巻』）——八家

の「上士上列」を筆頭に、人持組を「一等上士」、頭役・頭並を「二等上士」、平士を「三等上士」、与力を「一等中士」、御歩を「二等中士」、御歩並を「下士」として格付け——に基づき、いわゆる御目見以上の平士から上(草高およそ100石前後以上)を「上士」とし、与力から御歩並までと陪臣で士族編入された者を「下士」とし、さらに足軽・小者以下の「卒族」を加え3段階の格付けを行った。分析の対象となるデータの概要を一覧にしたのが表1である。

表1 金沢一中「48名」(卒業年次は明治30年~36年)

番号	家禄	家格	家格 (江戸期)	分限/ 立身	最終学歴	職業(昭和6年→10年)
①	16500石	上士	八家	分限	盛岡高等農林	青森営林局長, 男爵
②	1300石	上士	平士	分限	盛岡高等農林	盛岡高等農林教授, 林博
③	800石	上士	平士	分限	明治大学	死亡
④	300石	上士	平士	分限	帝国農科大学	死亡
⑤	250石	上士	平士	分限	海軍機関学校	予備役中佐
⑥	200石	上士	平士	分限	四高	大阪市浪速少年院
⑦	150石	上士	平士	立身	東大・工	荏原製作所取締役
⑧	150石	上士	平士	分限	京大	死亡
⑨	130石	上士	平士	分限	海軍兵学校	浅野セメント会社員, 豫海大佐
⑩	40俵	下士	与力	分限	金沢医専	開業医, 豫陸三軍医正
⑪	100石	下士	与力	分限	金沢医専	死亡
⑫	50俵	下士	御歩	立身	東大・法	死亡
⑬	12石5斗	下士	御歩	立身	陸軍士官学校	歩兵11連隊付中佐→福井連隊区司令官(大佐)
⑭	13俵	下士	御歩	分限	金沢医専	死亡
⑮	3人扶持	下士	御歩	立身	進学せず	実業
⑯	50俵	下士	御歩	立身	東大・文	四高教授
⑰	40俵	下士	御歩	立身	東大・法	金沢市街鉄道社長
⑱	90石	下士	給人	立身	明治大学	大阪日本電力
⑲	110石	下士	給人	立身	東大・工	帝国海事協会(神戸)
⑳	45石	下士	給人	立身	進学せず	不明
㉑	41石	下士	給人	立身	東大・農	東京営林局造林課長→侯爵前田家囑託
㉒	30石	下士	給人	立身	京大・法	東京大審院判事
㉓	5人扶持	下士	給人	分限	陸軍士官学校	予備役少佐
㉔	5人扶持	下士	給人	立身	東大・法	第16師団法務官
㉕	4人扶持	下士	給人	分限	陸軍士官学校	予備役大佐
㉖	6人扶持	下士	給人	分限	大阪高等工業	死亡
㉗	80石	下士	給人	分限	陸軍士官学校	不明→(郷)歩中尉, 売薬商
㉘	130石	下士	給人	分限	東大・工	死亡
㉙	70石	下士	給人	分限	東大・法	東洋水利組合重役
㉚	28俵	下士	中小将	分限	金沢医専	開業医
㉛	3人扶持	下士	小将	分限	東大・工	大連南満州工業学校
㉜	3人扶持	下士	小将	分限	海軍機関学校	広島女子師範学校、豫海機大佐

## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

③③	2人扶持	下士	小将	立身	東大・法	三井銀行堂島支店長
③④	30俵	下士	足軽	立身	陸軍士官学校	軍馬補充部部員, 豫騎中佐
③⑤	30俵	下士	足軽	立身	海軍兵学校	死亡
③⑥	20俵	卒	足軽	分限	陸軍士官学校	死亡
③⑦	22俵	卒	足軽	立身	進学せず	横浜私立ツクリス女学校
③⑧	1人半扶持	卒	足軽	立身	陸軍士官学校	死亡
③⑨	18俵	卒	足軽	立身	金沢医専	死亡
④⑩	12俵	卒	足軽	分限	陸軍士官学校	死亡
④⑪	18俵	卒	足軽	分限	陸軍士官学校	騎兵第十連隊長
④⑫	25俵	卒	足軽	分限	進学せず	死亡
④⑬	20俵	卒	足軽	立身	金沢医専	軍医(大阪衛戍病院)
④⑭	18俵	卒	足軽	分限	進学せず	小学校教員
④⑮	5人扶持	卒	足軽	立身	東大・法	大阪平野銀行→大日本紡績取締役
④⑯	20俵	卒	足軽	立身	東京高商	税務監督局吏員→金物商
④⑰	15俵	卒	足軽	立身	帝国農科大学	和歌山県立林業学校長
④⑱	15俵	卒	足軽	分限	東大・工	三菱筑豊鉱業所

(注1) 家禄は『加越能文庫解説目録』に記載されている数値である。由緒帳の原本とは若干値が異なる場合も見られた。

(注2) 「御歩」とは一般には「徒士」と記載される身分層のことで、「いたずらもの」との読みを嫌った加賀藩独特の当て字である。

## 3. 「上士」:「下士」:「卒」の構成比率から

「48名」の上士:下士:卒の比率を加賀藩武士団の構成比と比べてみよう(表2)。

表2 加賀藩士の戸数と金沢一中「48名」

士/卒	家格		金沢一中「48名」(%)	加賀藩士(%)	明治4年調「士」「卒」
士	上士	直参	平士以上	9 19%	1481 9%
	下士	直参	与力	2	343
			御歩	1(代々) 21%	3502 23%
		7(足軽出身)			
陪臣	給人・中小将・小将	16 33%	1751(推) 11%		
卒	卒	直参	足軽以下	13 27%	5382 57%
		陪臣	御歩・足軽以下		4092(推)
計			48 100%	16551 100%	16551 (100%)

(注1) 「下士」の「足軽出身」とは足軽の家で立身して「御歩」、あるいは明治3年「下士」編入となった家である。

(注2) 「加賀藩士」の直参の数は、『石川縣史 第貳編』所収の附録「侍帳」と金沢市足軽資料館展示資料の依って算出した。江戸期の陪臣数を示す統計資料は存在しないので、表中の陪臣数は「明治4年調「士」「卒」(『加賀藩史料 幕末篇 下巻])から逆算して推定した。

分析に先立ち、上表2種類のデータ比較が妥当であるのかどうか、次の2つの疑

問を検討しておきたい。

第一の疑問は、明治4年時点の「士」「卒」の数が最終的な士族編入者の数と一致しているわけではないのではないか、というものである。つまり、武士の自主的な平民籍取得と足軽・小者以下の層の平民籍編入はどの程度存在したのだろうか。明治3年の藩制改革では、足軽を中心に世襲の「卒」と認められた層は基本的に士族に編入され、「平民ニ差返」されたのは一代限りの「卒」や「仲間<sup>(4)</sup>・小者」といった層（特に陪臣の武家奉公人クラス）が大部分であった。同4年の調査で平民籍編入された「士」は33人、「卒」は256人であり、また平民人口のうち「元中間小者」が2333人と記載されている（『加賀藩史料藩末篇下巻』）。明治7年以降、数十～数百人単位の士族籍編入を求める請願書が度々提出されているが、その殆どは旧「仲間・小者」層によるものである<sup>(5)</sup>。つまり、「士」→平民はごく例外の現象であり、「卒」→平民編入で問題となった「卒」は実質武士とはいえない層であった。また、表2の「明治4年調『士』『卒』」の合計数が金沢藩庁へ提出された「由緒帳」の「約1万7千点」（≒士族編入者数）とほぼ一致している。

第二の疑問は、維新後の金沢の人口動態の変化を考慮に入れていないのではないか、というものである。金沢に本籍を置く士族数は、維新後から中期にかけて減少の一途をたどっている。小山隆（1931）によれば、明治3年から明治31年のあいだに士・卒あわせて54.1%にほぼ半減しているというし、石川県統計書でも明治13年から31年のあいだに平民人口は増減がないのに士族人口は74%に減じていることが確認できる。では、本資料の時点では、旧身分比率にどのような変化が生じていたと考えられるのだろうか。変化の大きい要因は明治15年頃からの松方デフレによるものである。すなわち、金禄公債証書を利用した資金運用の破綻<sup>(6)</sup>、という事態である。これにより無業に留まったままの金利生活は給与所得による有業生活へ踏み出すことを余儀なくされたのである。ということは、経済的にも有利で社会的にも威信の高い官吏や軍人、教員への転身がより可能な層ほど移動性が高かったと思われる<sup>(7)</sup>。したがって、「松方デフレ以降、平士以上の家で金沢市に留まった者は1割にも満たない」という風評は、ある一定程度の事実を映しているのであり、それは、県外で官途に就くだけの教養ストックと社会関係ストックを併せ持っていた層ほど旧身分構成比が薄くなっていたと読み替えられるのである。

この点に留意しながら本分析は表2を利用し、「48名」の身分別構成比の特徴を次のようにまとめてみる。

**(1) 上士の比率が高い。**

平士以上の上士層は藩全体のわずか9%弱であるにもかかわらず、一中卒業生の中では19%を占めている。明治30年頃の上士戸数比率が実際にはより小さいとすれば、この層からの卒業生輩出率は相当高いものであったと推測できる。特徴的な家系を挙げておくと、まず①が加賀藩の最高位の武家である「八家」のうちのひとつであり維新後は華族に列せられている。③は代々奉行職を勤める家系で父は軍艦奉行である。対照的に⑦は陪臣中の「給人」と呼ばれる身分から「御算用者」を経て平士に立身した異例の家系である。

**(2) 陪臣の比率が高く、とりわけ多くが「給人」層で占められている。**

下士層の一中卒業生に占める構成比(59%)も藩士全体中のそれ(34%)を大きく上回っている。これは陪臣中の「給人」と呼ばれる層が突出して多数(16名中12名)を占めているからである。給人とは陪臣団の最上級層で、家政(財政・軍政両面)を取り仕切る幹部である。彼らの出自は早くから仕えた譜代が中心であるが、中には江戸中期以降に召し抱えられ2~3代にわたり功績を積んで給人へ昇格した者も少なくない、といわれる。本資料では⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿が浪人から、㉑が足軽・同心から、㉒が医者からのそれぞれ召し抱えである。知行高は数10石~100石前後と平士程度の禄が給されている者もいるので決して富裕でないにせよある程度の財産ストックがあったと考えられる。反面、一般には「下級武士」という呼称が与えられているように、藩内での家格は陪臣ゆえに低く位置づけられ与力や御歩小頭と同格であった。

彼らの父・祖父の職歴をみると、⑬と⑲とがそれぞれ「奥向御近習」「家老役勝手方」という各主家での最高幹部であり、また、㉑が「国学御用掛、藩掌社詞掛」、㉒が経武館の槍術師範、㉓が「国学御用掛、書写方」と壮猶館の「大砲教師」、というように各家に留まらず藩の学問・教師部門へも登用されている。㉔は馬医・蹄鉄師の家系であり、維新後の金沢藩では騎兵隊士に転身している。給人より下の身分(中小将、小将)の陪臣4名をみてもこの特徴は同様で、㉕は父が壮猶館の小銃教師、㉖は陪臣の足軽から身を起し曾祖父の代に小將組に昇進、父は維新後、医学館、小学所の教師を歴任している。

加賀藩校には明倫堂(文学)と経武館(武術)のほかに、1854年に西洋軍学の研究のために開設された壮猶館があり、そこでは軍学だけでなく医学、航海術、測量、洋算など洋学全般が教授された。いずれの藩校においてもそうであったが教師は人材難で陪臣からの登用が多かったといわれている。

ここで、陪臣団に占める給人比率を用いて、給人層からの一中卒業生輩出率を上

士層のそれと比べてみよう。この比較が可能なのは、後にも論じるように、給人層が県外に出て教員や官途に就くための教養や学問を上士層と遜色ない程度（あるいはそれ以上）に兼ね備えており、維新後の県外への転籍率は上士層と同程度と推測できるからである。さて、網羅的な統計資料がないために、人持組・青山氏の陪臣団から20%前後が給人として<sup>(8)</sup>、これを全体(6,000戸弱)に適用すれば1,200戸が給人の総戸数となる。すると、1,000戸あたりの輩出率は10人となり、上士層からの輩出率は同じく6人(9/1,481)であるから、1.5倍以上多いことになる。

### (3) 代々御歩の家系からの輩出率は低い。

直参の下士層(8名)の内訳は、与力・御算用者2名、足軽からの立身組が5名であるのに対して、代々の御歩からはわずか1名(⑭)である。立身組の事例をあげると、⑫⑯(兄弟)が祖父の代に割場付足軽から経武館居合剣術師範として定番御徒へ立身、父はその職を継ぎつつも明治3年に権少属(下級官吏)、砲兵隊砲長と昇進、⑬は祖父の代に足軽から厨方書手、卒族小頭と昇格し終身禄5石を受領し、父も金沢藩で陸軍伍長を勤めている。また、⑰は江戸浪人中に足軽として召し抱えられた家で祖父の代に御歩へ昇格、⑮も農民の出自で小者→足軽→御歩(小坊主)と目覚ましい立身を遂げてきた家系であり、他身分からの参入者として成功している。

さらに、足軽として幕末期を文官や武官として功績を積み、明治3年に「下士」編入された家系の者が2名存在している。⑳㉑は父が壮猶館砲術稽古世話役→海軍下士と経歴を積み、㉒も父が「新流砲術稽古指引」(少尉相当)→壮猶館砲術教授を歴任して「割場付支配御徒並」として士族編入され、後、金沢藩で学政所六等教師になっている。このような形での「士」族編入者が全体でどの程度いたのかは定かではないが、明治4年調の「士」「卒」の構成比からして藩末期に身分構成比の大幅な変更を伴う移動があったとは考えにくい。

次に、⑩と⑪がそうである「与力」と「御算用者」の藩内に占める特異な地位に着目しておきたい。まず、与力とはもともと武功によって藩士に取り立てられた外来者の集団を指す。家格は御歩の上位に位置づけられ(⑪は御歩頭支配という地位)、その職務は時代を経て次第に藩の事務(各奉行付の留書)や城中の勤番を担うようになった。彼らの藩内における“よそ者”という地位は、金沢の周縁部に集住させられるようになった事実がよく表象している<sup>(9)</sup>。御算用者とは藩の経理業務を行う算用場で計算事務に従事した文官で、家格は御歩～与力クラス、百余戸を数えている。この職は一代限りであり、人材は「筆算御撰」という試験により採用され



## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

た。この制度ゆえ御算用者の親は子に家督と職を継がせるために幼少期から算術と習字の教育を受けさせた<sup>(10)</sup>。維新後に官吏に転身した者の中で彼らは少なからず含まれていたといわれている。

つまり与力や御算用者の層はその実務能力が買われた“よそ者”として存在したがゆえに、ますます専門技術者・知識人に特化して家督の維持に努めなければならない性格を帯びた集団であった。⑩は与力格の御算用者で、父は維新後、権少属として地方官吏に転身している。この家系は、5代祖から父まで祖父を除いてすべて陪臣や平士からの養子を迎えており、嫡子の不在という不幸かどうかは不明であるが、結果的には、能力・資質を認められた者を己の血筋に注入することによって「職」を維持してきている。

## (4) 足軽・小者からの輩出率は低い。

5,000余戸を数える直参足軽・小者出身者、また4,000余戸と推測される陪臣の御歩以下の層出身者を合わせて13名(27%)という数字は、藩内での構成比57%と比べて相当低い。直参は名目一代限りとはいえ代々継がれてきた家が多かったが、そのような家系出身者は少数派であり、むしろ過半数(13名中7名)が農民・町人・医者系の系譜を引く足軽によって占められている。④は陪臣の足軽が英式の歩兵訓練を受け、⑦は町人の祖父が小者に→町人の父が同家に養子に入り大砲稽古を行い足軽格へ昇格そして苗字を名乗り、それぞれ卒族編入されている。加賀藩では新しく組織されようとした洋式軍隊の訓練に難渋し、卒族による銃隊編成では既存の足軽組織(本来なら武用専門である先手組足軽500戸、あるいは割場付足軽1,000戸)を運用することができず、小者や町人あがりも含めて抜擢し訓練を受けさせた。つまり単身化した戦闘者としての身体的・規律的資質や新知識の受容に適する人材がこの層には乏しく、他身分からの人材が新たに卒層へ吸収されたわけである。また、このクラスになると武術教師や下級行政官の経歴を持つ家系はほとんど見られなくなる。もしそういう功績があれば(3)の事例に含まれていただろう。ただ例外は③で、父は足軽身分のままで「問遺方書手」として下級文官の職に就いている。

つまり、代々加賀藩の最下級の分限を守って職務(飛脚、番人、普請の際の使役、雑用)を勤めてきた層からの輩出率は際だって小さかったということである。

以上のように、金沢一中卒業生を輩出する家にはある一定の要件があり、それを満たす家とそうでない家の輩出率の違いは相当なものであったことが明らかになった。その要件とは、第一に、家格では「直参ならば与力以上、陪臣ならば給人以上」

という要件である(「家格効果」)。このラインから上で48%を占め、また下の層と輩出率の比を計算してみると、およそ4～5倍、上位層が有利であるという結果になる。第二に、それ以下の家格であっても、比較的近い代(祖父の代前後)に身分内上昇を遂げた家、あるいはそれ以前の代も含めるならば農民や町人、浪人といった身分外から武家社会への参入に成功した家、という要件である(「立身効果」)。「立身」をここでは「父・祖父・曾祖父のいずれかの代に身分内上昇、あるいは、数代前までに農民・町人・浪人からの武家社会参入」と操作的に定義しておく。但し、身分内上昇とは細分化された序列移動ではなく、表2(「加賀藩士」)でカテゴライズされた階梯を越える移動を指すものとする。彼らは人材登用によって抜擢され身分制の障壁を乗り越えてきた層であり、そうでない層との輩出率の格差は相当に大きいと思われる。ただ人材登用を記録している統計資料はないので輩出率の比の計算はできない。これら2つの要件のうちいずれかを満たす家出身の者は「48名」中38名であり、およそ80%の占有率となる。

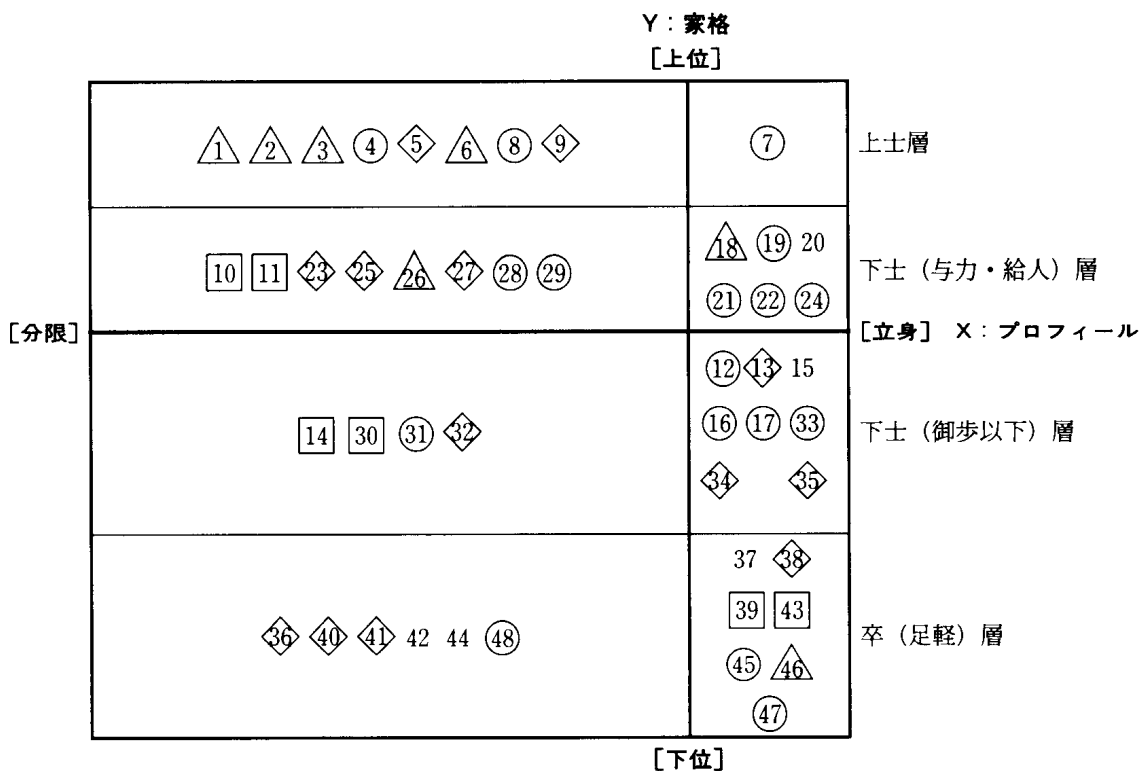
#### 4. 家格タイプの析出——家格効果と立身効果——

明治20年代末から30年代半ばにかけて金沢一中卒業生は、旧藩時代の身分において「家格効果」か「立身効果」のいずれかの要件を満たす層出身者が多数を占め、また輩出率からみてもそうでない層にとっては中学校参入がほとんど閉ざされていた。この偏向を図示するために、家格の上位/下位を一方の軸に、身分制の分限遵守/立身の経験をもう一方の軸(家プロフィール)としてクロスさせて4つの家格タイプを析出し、「48名」をプロットしてみる(図1)。

上位型と立身型の和集合が金沢一中卒業生輩出の要件を満たす主要グループ(79%)であり、積集合[上位・立身型](15%)がその中核として位置づけられる。平士層に占める立身型は例外で人数もごく少ないが、与力・給人層の立身型の存在はこれまで注目されなかった重要な意味を持っていることが析出された。では一体、与力や給人はどのような社会的存在であり、またどのような文化的エートスをもっていたのだろうか。

給人が陪臣であるがゆえに比較的容易に召し抱えられ家中内で昇進していくこと、また財産ストックも比較的余裕のあったこと、は先に述べた。しかし彼らはその出自も影響してか平士層と身分規定上の格差は大きいものがあつた。服装や乗物の規定、婚姻の制限(平士へ養子を出したり娘を嫁がせることの禁止)があり、いわば外見の麗姿や婚姻関係といったシンボリックな要素を剝奪される形で平士との一線が

金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動



(注1) 最終学歴を、○：帝大、◇：軍関係学校、□：医学系専門学校、△：他の上級学校、枠なし：進学せず、でそれぞれ表記した。

(注2) □11と15は兄弟である。

図1 家格タイプ

表3 家格タイプ別人数 (%)

	分限	立身	計
上位	16(33%)	7(15%)	23( 48%)
下位	10(21%)	15(31%)	25( 52%)
計	26(52%)	22(48%)	48(100%)

画されていたのである。この中途半端な立場が彼らの「又者意識」を増長させ藩への帰属意識を薄いものにしており、また、「時宜作法躰甚無礼・緩怠之仕形有之段被聞召候」(『藩法集四金沢藩』)と藩中から不安視される存在でもあった。ところが彼らは唯一の身分内上昇のルート——給人から与力へ、与力から平士へ——がごく狭い通路であったが開かれていた層でもあり、平士層とはいわば“遠くて近い”関係を取り結んでいたのである。

このような立場は、彼らをしてどのような家督維持や子弟教育の戦略をとらせたのだろうか。おそらく、“武士の構え”のような規範や上級武士の文化に同調しようとするアイデンティティ形成を促す一方で、現実的戦略としては、専門「職」を維持するために教育投資や才能ある養子の取り込みが日常生活の慣習として方向づけ

られ血肉化されなければならなかったと考えられる。

婚姻戦略は、本資料の給人出身者12名のうち父または祖父が養子である者は7名を数えていることから広く一般的な慣行であった。その対象は、家中を越えた給人相互や与力が主であり、場合によっては武士身分外も対象となった。この戦略の典型例として、給人から平士にまで立身した⑦の畠山家（東大工学部を卒業して荏原製作所を創業した畠山一清の家系）を取り上げてみたい。同家は戦国時代の能登の名家・畠山氏の末裔であるが、松波という姓で給人として召し抱えられて以来、養子を入れながら代々御算用者の職を維持し、曾祖父の代で御算用者から坊主頭（平士並）へ、祖父の代に組外（平士）150石への立身に成功している。5代前に給人からの養女に給人の養子を入れ直系は絶えているにもかかわらず祖父の代に姓を畠山に戻しているのは、失地回復モチベーションが家風として長らく続いていた証かもしれない。

また、教育投資に賭ける心性は、赤子誕生の儀式で、「『大学』の要文を読み聞かせ、筆を持たせ算盤を弾かせ」<sup>(11)</sup>た、という逸話によく表れている。給人から藩末期に与力組へ昇進した父をもつ大沢由也の私記によれば、祖父は町医者の子から婿養子であり理財の才で主家の財政を立て直した才人であったが、自らの漢籍の素養のなさを悔い、息子（つまり由也の父）には「幼時より四書五経の素読を授け、進んでは藩儒田中方平に就き、長じては明倫堂に入らしめ、専ら経書の研鑽を為さしめ」たという。その甲斐あって直参の与力組へ昇進した父の職務は壮猶館教師であり、火薬の原料や製作法の筆記など自宅に持ち込み「新兵器の研究に没頭する」毎日であった。この層の教育態度を数量的なデータで支持しているのが江森・竹松（1997）である。加賀藩でもっとも人気を博したといわれる西坂成庵の私塾・孝友堂の運営協力者のひとり中村豫卿（与力）の日記分析から、家督相続前の顔ぶれは馬廻組の平士から御歩クラスまで幅広いものであるのに対し、家督相続後も同塾へ通うのは給人が最も多かったことが明らかになっている。

つまり、彼らは、上級武士の文化や規範へ同化しようとする社会化ベクトルと、反対にそのような同調を断念し、理財・武芸・儒学といった専門分野の職人へ特化しようとするベクトルとが同居する奇妙な矛盾を内包した集団であったのである。

ところで、与力・給人層は家庭外においては、どのような人的な繋がりや趣味のネットワークを形成していたのだろうか。先の中村豫卿の参加する漢詩のサークルは同じ塾のメンバーで生まれ、また囲碁や謡曲、生花などの集まりは職場の同僚と頻繁に行われていた。つまり、趣味や教養が塾仲間や仕事仲間たちといった同じ身

## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

分層に広がるサークルで共有されていたのである。また、儒者・金子鶴村（給人）の日記を分析した竹松（1998）によれば、近世後期には上級武士と富裕町人が集う「詩社」と呼ぶ文化サークルが形成されておりその媒介者として鶴村が役割を果たしていたという。この役割を支えたのは「御儒者給人」というさらに身分内／外の区別の曖昧な立場であり、彼は書籍の賃借、詩会という場を通じた知識や教養の流通によって身分構造を侵犯することに成功している。先にみた藩校教授職への参入事例にも鑑みれば、与力・給人層は婚姻関係や趣味、教養、学問を通して同じ身分層との横系列のネットワークの絆を強めながら、身分構造の縦系列のネットワークにおいてはその結節点に境界侵犯的な地位を占めていたのである。

ところが、彼らの藩内に占める“よそ者”という地位は近代的な規範へのいち早くの適応という点では有利に働いた。バーガーの表現をかりれば、彼らの社会的意識が活動レベルとともに伝統社会に十分統合されず「不完全な社会化」であったことが「新しい構造を内面化することへの積極性」へと繋がったと考えられるからである。

とすれば、与力・給人層が中心となる〔上位・立身型〕のグループが明治維新後にどのように、どの程度学校利用をしたのか推察できそうだ。すなわち、このグループはアノミックな社会状況でも淡々と新しいセクターへ転身し、子弟も従前と変わらず私塾や学校に通わせていたのだろう。先の由也の父は同僚と石炭問屋の商売を始めまもなく倒産したがその後すぐ小学校教員へ転身しているし、由也自身も明治7年まで私塾へ通い引き続き小学校へ移っている。石川県の普通中等教育機関の在籍者数の推移をみると、明治16～20年の平均で210名（石川県専門学校初等学科）だったのが明治31年に910名（金沢一中）と増加している。士族の占有率は後者で50～60%程度、前者は不明であるが70～80%と見積るとおよそ3倍に士族の教育機会が増加していることになる。しかし、彼らは教育機会増加の恩恵に浴したというよりも、当初から上級武士層と並んでその占める割合は相当高かったと推察できるのである<sup>(12)</sup>。

## 5. 学歴エリートへの道——卒業後の進路傾向から——

一中への輩出率が高い要件を備えている家とそうでない家とで、卒業後の進路に特徴的な差異はみられるのだろうか。

家格効果を指摘するのはたやすい。「48名」の進学率は平均90%、家格「上位」組に限れば95%を超えているのに、「下位」の卒層では進学しない者が3名おり進学率

は77%と落ち込んでいるからである。この3名の学業成績は並み程度（席順ランク3が2名、4が1名）であったから学力的に進学できない状況ではなかったはずである。対照的に上士層9名は席順ランク3以下が7名を占めていたにもかかわらず全員が進学を果たしている。ここに卒層の家庭的貧困や自発的撤退をみることも可能である。しかしまた、大勢はメリトクラティックな選抜であったこともデータは示している(図2)。帝大への進学は成績上位層に厚い分布になっており、またどの身分層からも輩出している。卒層からは、④切米15俵の割場付足軽の家が四高→東大・工→三菱筑豊工業所、⑤医家の系譜をひく足軽の家が四高→東大・法→銀行員、⑦町人出の小者の家が七高→帝国農科大学→和歌山県立林業学校長、とそれぞれ子弟を転身させている。同様な見方で、軍関係学校進学者の成績分布は不振者層に厚くなっており、身分に関係なく成績下位層の受け皿となっていたことがわかる。よくいわれることだが、軍人は平士層にとっては旧藩時代の威厳を損なわず武職を継ぐ職業であり、下士や卒層にとっては医学系専門学校と並んで近代セクターへの安価で確実な参入ルートであったからである。このように、中学校に入学してしまえばその後はメリトクラティックな原理が作用していた、とも言えるのである。

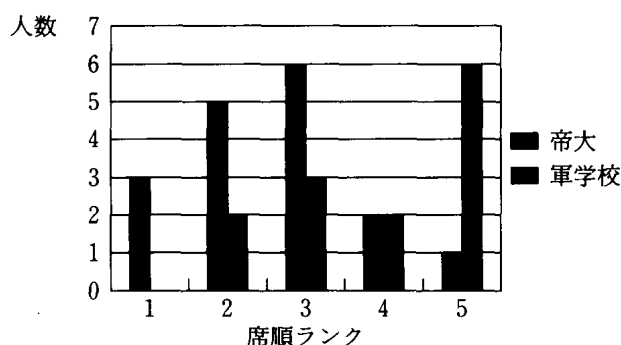


図2 席順ランク別 帝大／軍学校進学者数

表4 家格タイプ別 席順スコア平均・帝大輩出率・軍学校輩出率

	席順スコア平均			帝大輩出率			軍学校輩出率		
	分限	立身	全体	分限	立身	全体	分限	立身	全体
上位	61	37	54	25%	71%	39%	31%	0%	22%
下位	55	56	56	20%	40%	32%	40%	27%	32%
計	59	50	55	23%	50%	35%	35%	18%	27%

上記の2つの見解はどちらも正しい。能力主義社会とは再生産と流動性の2つが同居する社会であるからである。小論は、竹内(1999)も注意を促しているように、メリトクラティックな選抜原理ゆえの社会的再生産に目を向けたい。出身階層の文

## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

化や社会的意識が輻輳する形で“能力”に読み替えられてきたことである。では、この読み替えを最も有利に進めたのは一体誰なのであろうか。

ふたたび「家格タイプ」に戻ろう。話は単純である、どのタイプが一番成績優秀で学歴エリートを数多く輩出しているかみればよい。表4より、成績では[上位・立身型] (席順スコア平均37)が高いのが目立ち、他のタイプは相互に差がない。帝大輩出率の最も高かったのも[上位・立身型] (71%)であり、逆に低いのが[下位・分限型] (20%)である。特に、与力・給人で立身型の要件を満たしたり、あるいは給人から平士へ昇格した層に高級官僚や企業家が輩出される傾向がみられる (㉑東大・農→東京営林局造林課長, ㉒京大・法→東京大審院判事, そして先に紹介した㉓畠山一清)。単に家格が高いだけ(分限型上士層)では必ずしも学歴エリートとしては成功していない。華族①は盛岡高等農林学校→青森大林区署技手→青森営林局長・男爵, と「席順ランク5」のわりにそれなりの名誉職に収まっている。他は、④⑧の2人の帝大進学者が死亡しているのは残念だが、⑨海軍兵学校→海軍→浅野セメント会社員, ⑥四高退学→陸軍火薬製造所員→大阪市浪速少年院, ②盛岡高等農林学校→同校教授, ⑤海軍機関学校→予備役中佐, ③明治法律学校→陸軍騎兵少尉→死亡, となっている。

このように、学歴エリートの輩出、すなわち、中学校に入ってから学業成績というメリトクラティックなシステムの内部においては、ある特定の身分層の文化が持ち込まれていることが示唆された。それは従来のような上級武士の文化というよりも、むしろ与力や給人といった学識才能でもってしか身の立てようのなかったいわば“成り上がり者”の文化であり、学校における彼らの優位はより支配的な趨勢として作用したと考えられるのである。

## 6. 結語

金沢一中卒業生を輩出した旧加賀藩武士の家にどのような特徴や傾向が見られるのかを、先祖由緒帳の原本にあたることによって分析を行った。その結果、次の知見が得られた。

① 学歴エリートを輩出する家には一定の要件があり、それを満たす家とそうでない家の輩出率の違いは相当に大きい。その要件は、まず家格では、従来指摘されていたような相当な上級武士層だけではなく、“お目見え以下”の陪臣を中心とする下級武士層にも適格性がある。あるいは、もしそれ以下の家格ならば、人材登用で立身したり武士身分外から登用された家、いう要件である。そして、この要件から

外れた足輕以下の層を中心とする大部分の士族にとって、学歴エリート階梯への門は非常に狭いものであったと言わざるを得ない。

② 上記の要件を満たす家格パターンから析出された“下級武士”と称される層(「与力」や「給人」)のうち、立身を遂げてきた家からの学歴エリート輩出率が特に高いことが明らかになった。その理由は、彼らが武家社会の周縁部に位置し、藩中の規範に十分統合されず、家督維持のために子弟教育や婚姻戦略などを通して自らを機能集団へと磨き上げる形で社会化されてきた集団であったからである。

以上のように、小論はこれまで教育社会学ではあまり取り上げられなかった“成り上がり者”の武士たちの学歴エリート形成に果たした重要な役割を析出することができた。安田三郎は、近代日本の立身出世主義の特徴を、直接には地位の上昇を志向しない「業績志向」にみた。限られたポストの分け前をめぐる競争よりも、尽きることのない業績達成へエネルギーを方向づけた方が支配階層にとっても都合がよいというのである。そのような志向を旧藩時代に血肉化してきた層が明らかになったともいえる。彼らは、藩の下級官僚や学者・教師といった専門技術者として、政治的なものを省みることなく日々の職務に専念できる資質へと社会化されてきた身分層であったからである。

#### 〈注〉

- (1) この価値転換が「なぜ」大きな矛盾を表出することなくまた諸勢力間の葛藤や混乱も少なくスムーズに進んだのか、という疑問に対しては、理念型モデルが提出されている。R.P.ドーア(1970)が幕末期の「属性の原理」の弱まりを評価したのに対し、竹内(1978)は「身分的上下構造」と「開放構造」が相反するものではなく両者の結合こそが上昇移動アスピレーション湧出の推進力になったとしている。
- (2) 廣田は文化的再生産という仮説で、濱名も「財産ストックを持っていたものが無条件に有利な社会移動をしたわけではなかった」として、文化的エートスや社会的意識というファクターの重要性を示唆している(園田・濱名・廣田 1995, 238-264頁および112-141頁)。
- (3) 「由緒帳」の紛失分に何らかの偏りがあるのかどうかは不明である。現存している分についての基本的な統計作業もなされていない。小論は「大きな偏りがない」という前提に立っての考察であることを断っておかねばならない。



## 金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

- (4) 「中間」は「仲間」とも表記される。
- (5) 大内・土屋（1963）参照。また、規模の大きいものでは、明治28年に出された「舊金澤藩士族籍訂正秩禄下付請願」で旧「中間小物<sup>ニッ</sup>三十人小人」1,137名によるものである（久徴館同窓會 1895）。
- (6) 明治9年8月の太政官第百八布告で金禄公債証書の下附があり、石川県士族は15,000余人がこれを受けている。金沢でもバブル景気をもたらした。「為替會社」（金沢藩の公金も取り扱っていた金融機関。後に「北陸銀行」——ただし現在の北陸銀行とは異なる——）の預金者4,000余名のうち3分の2が士族であった（『石川県史第四編』）。その反動である松方デフレによる株券・土地の資産暴落は金利生活者に大きな打撃を与え、石川県の富裕層の新旧交代の転機となったといわれる。
- (7) 当時の「青年の男子は他県に赴きて巡查となり教師となり」といった憐憫を込めた噂を、小山（1931）は移動＝没落論として捉えたが小論は必ずしも与しない。近代的職業への転身という客観的にみて好ましい結果を招来したからである。また、「猪山家文書」を分析した磯田（2003）によれば、猪山家の親戚筋のうち官吏や軍人へ就職できた者ほど大都市へ移住し、失敗した者は金沢へ残留（あるいはUターン）する傾向にあった。
- (8) 亀田（1970）の「第7表」から元治元年の構成人数を参照（「女中」「町人」を除く）。ただ、幕末期に近づくとつれて陪臣団の格付けは各家によってかなりの流動性が見られるようになっていることに留意しておきたい。
- (9) 1667年、藩は与力に対して、向こう3カ年の内に小立野と泉両所に引越すべき命を出している（日置謙 1942）。両地区とも金沢と石川郡の境界に位置していた。
- (10) 第四高等学校教授・中野嘉作の父・直久は御算用者で、9歳で手習いの私塾へ通い、13歳で剣術、居合、槍術と並んで砲術と算術を学んでいる。算用者の試験を受けたのは20歳の時である（横山 1991）。
- (11) 茨木家の給人・森田平次の誕生時の逸話（鈴木 2002）。
- (12) 明治末年にかけて家格タイプ別構成比はどのような変化をしたのだろうか。ここに仮説を提示しておきたい。明治32年に3中学の増設により在籍者数は全県で1,800名程度に増加し末年まで続く。[金沢士族]は他郡の中学へはほとんど進学しないので一中と二中を合わせた1,100名が彼らに与えられた定員となる。だが、平民層の進出により士族の占有率が40%程度に落ち込むので[金沢士族]の教育

機会は明治30年代当初からほとんど増加していないことになる。ということは本資料の旧身分構成比には大きな変化がなく、近代セクターへの地位を固めた彼らの職業効果を媒介とした社会的再生産へその比重を移しつつ構成比の構造は維持されていった可能性が高い。

#### 〈引用および参考文献〉

- Berger, P., B. Berger, and H. Kellner 1973, *The homeless mind: modernization and consciousness*, Vintage Books, New York. (=1977, 馬場伸也他訳『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』新曜社)。
- ドーア, R. P. 1970, 『江戸時代の教育』岩波書店。
- 江森一郎・竹松幸香 1997, 「加賀藩与力, 中村豫卿の学習・教育環境と文化サークル」『金沢大学教育学部紀要』第46号。
- 深谷昌志 1969, 『学歴主義の系譜』黎明書房。
- 日置謙編 1942, 『加能郷土辞彙』金沢文化協会。
- 磯田道史 2003, 『武士の家計簿——「加賀藩御算用者」の幕末維新』新潮新書。
- 亀田康範 1970, 「加賀藩の陪臣——人持組青山氏家臣団を中心として」『北陸史学』第18号。
- 1973, 「幕末維新加賀藩の陪臣」『地域と文化』創刊号。
- 菊池城司 1967, 「近代日本における中等教育機会」『教育学研究』第22集。
- 2002, 『近代日本の教育機会と社会階層』東京大学出版会。
- 小山隆 1931, 「士族の地域的移動傾向」『季刊社会学』2輯。
- 久徴館同窓會編 1895, 『久徴館同窓會雑誌』第79号。
- 前田育徳会編 1958, 『加賀藩史料藩末篇』。
- 森下徹 1990, 「加賀藩割場と足輕・小者」『史学雑誌』第99編第3号。
- 大内兵衛・土屋喬編 1963, 『明治前期財政経済史料集成』第8巻, 明治文献資料刊行会, 314-317頁および508-583頁。
- 大沢由也 1978, 『青雲の時代史——芥舟録・一明治人の私記』文一総合出版。
- 園田英弘・濱名篤・廣田照幸 1995, 『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会。
- 園田英弘 1993, 『西洋化の構造』思文閣出版。
- 鈴木雅子 2002, 「加賀の下級武士の生活——森田平次の記録から」『石川郷土史学会々誌』第35号。

金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動

- 竹松幸香 1998, 「加賀藩文化ネットワーク——近世後期の儒者・金子鶴村の事例」  
『ヒストリア』第161号。
- 竹内洋 1978, 『日本人の出世観』現代選書。  
———1999, 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社。
- 安田三郎 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会。
- 横山方子 1991, 「ある加賀藩算用者の明治——四高教授中野嘉作一家の人びと」『石  
川郷土史学会々誌』第24号。

---

ABSTRACT

**Analysis of the Social Mobility of Kanazawa I Middle High School  
Graduates Based on *Samurai* Classes in the Old Kaga Domain**

INOUE, Yoshito

(Kanazawa Seiryō University)

Ushi 10-1, Goshō Town, Kanazawa City, Ishikawa Pref., 920-8620 Japan

Email: inoue@seiryō-u.ac.jp

The purpose of this research is to determine which *samurai* classes among the graduates of Kanazawa I Middle School in the old Kaga domain successfully entered new careers as elites in school education. The data for the research was gathered from a list of Kanazawa I Middle School graduates for the middle and final part of the Meiji Era.

In recent years, research on the *samurai* classes that dealt with reorganizations of the old social standing into new class systems did not observe the classes as a single group, but examined them according to their property, social awareness and cultural ethos, which were divided unequally under the old social class system. In this thesis, I choose to focus my analysis on social awareness and cultural ethos in the middle and final part of the Meiji Era, a time in which models of people who moved ahead in society were spreading among ordinary people. Below are the outcomes of my research:

1. There was one specific condition that significantly improved the prospects of a family producing an elite. The families that succeeded in producing elites were ranked *yoriki* and *kyūnin* or higher. My calculations on the number of elites produced show that there were significant differences between families in these ranks or higher and those that were not. It was found that the families in the higher ranks produced elites four to five times as often than the lower families, which makes it clear that higher ranked families produced more elites in school education. Of the families lower than the two above-mentioned ranks, there were some whose ranks had risen due to promotion within the clan. Although such promoted families were a minority under the strict class system, it seems that they were regarded favorably in the society after the Meiji Restoration, which set a greater value on academic background. By contrast, I found that the ratio of production of elites from *kachi* and *ashigaru* ranks was very low.

2. Why is the percentage of elites produced in school education high in the *yoriki* and *kyūnin* ranks? It seems that the reason is that the members of these ranks internalized the original attitudes of the *samurai* toward “duty” and studying. After the Meiji Restoration, they did not find value in studying due to its merits, but naturally entered into schools of higher grade under the modern system under their attitude that *samurai* should have “a homeless mind.” They tried hard to make themselves into a functional group by educating their children and by marriage strategies.